19世紀末社会主義ユートピアと現代
―― 国家社会主義 vs 共同体社会主義 ――

荒　木　詳　二
情報文化論研究室

Über die sozialistische Utopie in der Jahrhundertwende

Shouji ARAKI
Information and Culture

群馬大学社会情報学部研究論集
第20巻　79～98頁
2013年２月28日

JOURNAL OF SOCIAL AND INFORMATION STUDIES
No. 20　　pp. 79―98
Faculty of Social and Information Studies
Gunma University
Maebashi, Japan
February 28, 2013

19世紀末社会主義ユートピアと現代
―― 国家社会主義 vs 共同体社会主義 ――

荒　木　詳　二
情報文化論研究室

Über die sozialistische Utopie in der Jahrhundertwende

Shouji ARAKI
Information and Culture

Zusammenfassung

In dieser Abhandlung wird versucht, darauf zu antworten, wie die Utopie definiert wird, wie die sozialutopische Literatur in der Jahrhundertwende entsatnden ist und was für eine Utopie damals geplant und beschrieben wurde. Dabei wird analysiert und debattiert, wie die Organisation der arbeitenden Utopisten aussieht und was den geschilderten Sozialismus kennzeichnet.

Einige dieser Werke, besonders “Looking Backward” und “News from Nowhere” haben direkt nach der Publikation viele Leute begeistert und bis heute einen großen Einfluss ausgeübt. Aber ist diese sozialistische Utopie auch heute nach dem Zusammenbruch der sozialistischen Länder gültig?

キーワード：ユートピア，社会主義，19世紀末

1．はじめに

21世紀の最初の10年を過ぎた今日の世界の情勢は決して明るいものではない。カジノ資本主義とも弱肉強食型資本主義ともいわれる金融資本主義の世界支配，ユーロ危機を震源とする世界不況，原発事故に代表される環境破壊，二酸化炭素の排出による地球温暖化，新自由主義的経済政策採用による

格差の拡大と貧困層の急増，さらに第三世界の人口爆発や中東危機，イスラム原理主義勢力の拡大など世界は多くの不安定要因を抱えている。

20世紀は革命と戦争の世紀であったが，失業者のいない，貧富の差のない平等な社会＝労働者のユートピアを目指した社会主義革命は，失業問題の解消，教育や医療の無料化，さらに生活用品や運賃の低価格維持など一定の成果を上げたが，結果的にノーメンクラトゥーラ（共産党幹部・官僚）という「赤い貴族」の独裁を生み出し，彼らを中心とした超管理社会というディストピアを出現させた。党と国家と軍が一体になったソビエトの「国家社会主義」に関しては，ゴルバチョフを中心とした「ペレストロイカ」(再建)という上からの改革が唱えられたが，経済改革にも政治改革にも失敗し，共産党も機能不全に陥りソ連邦は1991年に解体した。一方「人間の顔をした社会主義」を唱え，民主化された社会主義を求めた東欧の市民や学生たちの運動も初めは挫折の連続だった。1953年のベルリン蜂起，1956年のハンガリー革命，1968年の「プラハの春」はことごとくソビエト軍の戦車に押しつぶされた。しかし1980年代になると民主化を求めるポーランドの「連帯」が合法化され，1982年に旧東ドイツのライプツィヒで始まった「月曜デモ」はドイツ全国に広がり，1989年にはベルリンの壁が崩壊し，東欧圏でもソビエト型社会主義は崩壊した。社会主義政権でありながら，市場経済を取り入れた中国やベトナムは，急激な経済成長を遂げたものの，一党独裁の弊害である検閲制度などがなお存続し，共産党幹部の「赤い貴族」を中心に賄賂などによる腐敗が進み，経済格差が広がり，平等を目指す社会主義ユートピア建設の夢は遠のいた感がある。

かくして20世紀の壮大な社会主義のユートピア的実験は終焉を迎えた。今日では資本主義の一人勝ちが宣言され，スーパーパワーはもっぱらアメリカの称号となった。ソ連崩壊とともに「ユートピアの終焉」が唱えられ，世界はユートピア像を見失い，羅針盤をなくした船のように迷走を続けているように見える。世界の時間は一気に百年間後戻りし，金融資本主義・市場万能主義のなかで，中間層は厚みをなくし，貧困に喘ぐ大衆は急増し，生活格差は日々増大している。

しかしユートピア思想は歴史的に見ると，さまざまな浮沈を経験しながらも，形を変えながら古代よりきわめて長い間生きながらえてきた。20世紀後半の冷戦時代にソ連邦と覇を競ったアメリカも19世紀には宗教的迫害のない，一攫千金が叶えられるチャンスに溢れた「ユートピア」であり，アメリカ国民は「選ばれた民」であり，アメリカは「約束の地」と呼ばれ，世界中から自由と富を求める大衆がアメリカを目指した。「アメリカン・ドリーム」という言葉はなお人々を魅了しているが，2012年の「われわれは99％だ」というアメリカ市民の大衆運動は，金融の中心のウォール街をデモの渦で取り囲み，アメリカが依然として世界でも有数の「貧困大国」であり，１％の富裕層が20％の富を持つ大格差社会であることをはっきりと示し，今日のアメリカが「ユートピア」ならぬ「ディストピア」でもあることがより明らかとなった。古代では軍事都市スパルタや民主制のアテネが，また共和制のローマやローマ帝国が，近代では共和制のヴェネチアが大衆の「ユートピア」のイメージの源泉となったこともあった。21世紀の今日ユートピアの資格のある社会は存在するのであろうか。

本稿では19世紀末の社会主義ユートピアとその背景に焦点を当て，特に当時の社会主義ユートピア

小説の代表的作品であるエドワード・ベラミーの『かえりみれば』（“Looking Backward 2000-1887）とウィリアム・モリスの『ユートピアだより』（“News from Nowhere”）を取り上げて，その内容分析を通じて，十九世紀社会主義ユートピアの意義と限界を考察する。

さらにこうした文学作品の政治的・歴史的背景を探るために，19世紀の社会主義運動の展開のなかで両作品と関係する集会や書籍・パンフレットに触れてみたい。

今日世界を観察すれば，現実変革を主張するユートピア運動の芽はあちこちに吹き出しているように見える。エコロジー，フェミニズム，協同組合運動，地域通貨運動などはすでにグローバルな現状改革運動となっている。こうした運動は行き過ぎた市場中心主義や大量生産・大量消費システム，さらに家事・育児労働のシャドウ・ワーク化など現代資本主義の欠陥を糾弾し，その変革を唱える運動である。本稿ではきわめて現代的なユートピア運動ともいえる米における反格差運動と日本における反原発運動に焦点を当てて，19世紀世紀末ユートピアとの関連を考えてみたい。

2．ユートピアの定義

ユートピアほど造られた時期がはっきりしている言葉も少ないが，1516年に生まれたこの言葉はトマス・モアの言葉遊びから生まれたものである。普通『ユートピア』と呼ばれている彼のラテン語の著作の正式名称は『Libellus vere aures, nec minus salutaris quam festivus, de optimo rei publicae statu deque nova insula Utopia』で，『ユートピア新島と共和国の最良政体に関する有益で楽しい真に優れた小著』という長いものである。マニュエル夫妻の『西洋におけるユートピア思想』によれば，1516年に『ユートピア』が出版される前には，ただ単にラテン語で nowhere を意味する「Nusquama」という題が考えられていたようである。その後トマス・モアは新語を作るべく，否定を意味するギリシャ語の ou のラテン語訳 u と，場所を意味するラテン語 topos を結びつけ，utopia という語を造ったのだった。

辞典類を見てみると『広辞苑』では「何所にもない場所」の意との説明があり，さらに１）トマス・モアの小説『ユートピア』の説明と２）（トマス・モアの作品に基づく）現実的な夢幻境，理想郷という定義が記述されている。「現実的な理想郷」という複雑な記述に「ユートピア」二面性が見て取れる。

ちなみに1873年（明治15年）本邦初訳の『ユートピア』はラルフ・ロビンソンの英訳からの重訳である。ドイツ文学研究者の轡田収の説によれば近代のユートピア小説の誕生は公共圏の成立と密接な関係を持ち，公共圏の形成の遅れたドイツと日本はユートピア小説後進国だということになる。

ドイツ語の代表的な文学事典であるヴィルペルトの『Sachwörterbuch der Literatur』では，「ユートピア」とは「理念的には到達可能だが実際は到達不可能な国家及び社会の理想状態」とあり，到達目標としては共産主義的な目標や貴族主義的な目標さらに自由主義的な目標が挙げられている。なおドイツにはユートピア小説にあたる分野として Staatsroman（国家小説）があり，ヴィルペルトは大体の場合教育的および理論的な意図を持って，その時代の理想国家像を実現可能なものとして描く小

説であると述べている。

一般に現実との関係で「ユートピア」という語を使用するとき，「ユートピア」的プログラムを指す場合と「ユートピア」的欲望を指す場合があるのではなかろうか。アメリカのマルクス主義批評家フレデリック・ジェイムソンはユートピアの系譜として「ひとつはユートピア的プログラムの実現に専念するものであり，もうひとつは，さまざまな暗示的表現や習慣において表面化する，あいまいだが遍在するユートピア的衝動である」とする。ジェイムソンは前者をシステム的なものとし，例として政治的実践，文学的営為，計画的共同体，都市構想など挙げ，後者を曖昧で雑多なものとし，例として自由主義的改革や商業的成功，さらに詐欺や誘惑などを挙げている。アメリカの社会哲学者であるルイス・マンフォードも，ユートピアを「自己の流儀に従って外部世界と交渉を保つために，その外部世界を変化させようとする」ことを目標とする『再建のユートピア』と，厳しい現実と遭遇して，避難し，逃避するための場所を『逃避のユートピア』と名付けている。

ユートピアと同じような使われ方をする語に「イデオロギー」があるが，社会学者のカール・マンハイムは『イデオロギーとユートピア』でユートピア的意識の秩序破壊的行動に注目し，イデオロギー的意識との違いを以下のように説明している。マンハイムは「ユートピア的意識とは，まわりの<存在＞と一致していない意識である。どういう意味で一致していないかといえば，いつもそういう意識は，この現実のなかではまだ実現されていないような要素にのっとって，体験や思考や行動の方向づけを決めているからである」とし「ユートピア的という言葉の意味を，現実を超越した方向づけのうちでも，とくに現存秩序を破壊する働きをもつものだけに限定することによって，ユートピア的意識とイデオロギー的な意識との区別が明らかになる」とする。

ユートピアは反現実，反秩序を特徴とするが，一方では実現可能性を確保しておかねばならず，過去に実際生起するか，現在に実在するか，将来において実現されるものでなければならない。西欧思想史研究者である佐々木斐夫は，ユートピア思想の基準とは「その時代の既存秩序に批判を加え，それとは反対の価値観に基づく理想社会の姿を，草案であれ，具体像であれ，描述している」ことにあるとしている。

イギリスの社会学者クリシャン・クマーは，ユートピア社会を想定する思考に大きな貢献をしたのがキリスト教における「かつて存在し未来に存在する楽園」である千年王国の思想と古代ギリシャの異教的な思想を挙げている。「善き生活や完全な社会に関する古代の観念は，都市という形態に堅く結びついていた」とクマーはユートピアの都市とギリシャ思想の強い結びつきを強調している。

佐々木はまたユートピア社会の類型として三類型に分類し，ルネサンス期までは貴族などエリートたちが主体のエリート階級社会，トマス・モアの『ユートピア』以降は社会主義社会，さらに機械文明の発達に依拠する高度文明社会を挙げ，さらに高度文明社会を自由で平等で豊かな社会と，世界大戦やナチズムやスターリニズムの悲惨な経験から生まれた超管理社会という暗黒社会＝ディストピアに分類している。

西洋中世史家の樺山紘一は，歴史上のユートピアを次のように整理している。17世紀のユートピア

には知識の向上や人知の向上を前提とする科学技術文明のユートピアとキリスト教異端派の宗教的ユートピアがあり，18世紀にはおおむね自由で計画的な科学技術文明ユートピアが描かれたとする。さらに19世紀のユートピアとしては貧困を克服した豊かな社会が描かれた科学技術文明ユートピア，反科学文明的なロマン主義的ユートピア，社会主義ユートピアさらに理想国家のうちに暗黒面を見てとった文学的な「諧謔のユートピア」を挙げている。19世紀後半から20世紀にかけて行われた都市改造計画にはユートピアの理想が見て取れると指摘する一方，20世紀に新たに加わったユートピアには科学技術が極端に発達したSF的ユートピア，社会と技術文明が人間のコントロールの及ばなくなった反ユートピア（ディストピア）があるとし，後者を社会主義や修正資本主義の矛盾の文学的表現としている。

東洋にも「桃源郷」などの「楽園」があるが，ヨーロッパ生まれの「ユートピア」は東洋の「楽園」とは異なる理想国家・理想都市であることにも注目すべきであろう。巌谷國士は『シュルレアリスムとは何か』でこうしたユートピアの特徴として空間的には自然の矯正と時間的には時間の不在を挙げ，さらに「衛生的で清潔で明るくて，管理が行きとどいているだけでなく，金銭，貨幣経済を好まぬこと」といった特色を並べて，ユートピアは偽善的で自由や個性不在の社会だとする。

以上まとめると次のようになる。トーマス･モアの言葉遊びから生まれた「ユートピア」は反現実･反秩序の意識から生まれ，それゆえ秩序破壊の運動と通じるが，一方単なる夢や願望に留まらず実現性の可能な社会でなければならない。歴史的にはユートピア社会の主人公もエリート階層から労働者に移っていったが，一方20世紀になってからは都市計画などにユートピア構想が利用される一方，人間の制御できない機械文明が反ユートピア＝ディストピア社会の主人公となった。またユートピア社会は平等を強調するあまり超管理社会＝ディストピアになりやすいという弱点を持つ場合も多い。

3．社会主義ユートピアの構造

3．1．　モリスのベラミー批判の視座

19世紀末に書かれ，現在まで世界で読まれている社会主義ユートピア小説にアメリカの社会主義者であったエドワード・ベラミーの著した『かえりみれば』とイギリスの詩人・芸術家であり社会主義者であったウィリアム・モリスの『ユートピアだより』がある。

よく知られているようにモリスはベラミーの『かえりみれば』に対する反感から『ユートピアだより』を書いた。イギリスの歴史家A.L. モートンは『イギリスのユートピア』でモリスの機関誌『コモンウィール』での『かえりみれば』批判を引用している。まず労働の在り方について。「未来の理想は，労働をできるだけ軽減することによって人間エネルギーをへらすことではなくて，むしろ労働の苦痛を，それが苦痛ではなくなるまで軽減することにあると，わたしは考える。（中略）　真の幸福にしてかつ有益な労働の動機が，仕事そのものの喜びにあることは，改めて言うまでもなかろう。」次は労働の組織化の問題である。「ここで注意を要するのは，社会主義者のうち，生活とそれに必要な労働の組

織化の問題が，だれも責任を感じない一種の魔法によって運営される，巨大な中央集権によって解決されるとは考えぬ者もあることである。むしろ逆に行政単位が，どの市民もその細部に至るまで責任を感じ，しかもそれらに関与できるほど小規模であることが必要となろう。つまり個人が日常的なことがらを，〈国家〉という抽象体に転嫁することなく，相互の意識的なかかわりにおいて処理せねばならぬのである。そうした多様な生活こそ，条件の平等と同じく真の共産主義の目的となるのである。」

モリスの批判はこうして国家つまり管理に関する批判と労働の質に関する批判に帰着する。

ここではしかし二つの作品に見られる社会観，労働観，政治体制，フェミニズム，芸術観を検討することによって二つの作品をトータルに評価するとともに，今日においても論争を生んでいる両者の社会観・国家観を明らかにしてみたい。

3．2． ベラミーの『かえりみれば』

F. ジェイムソンの『未来の考古学１』によれば，ユートピア小説で『かえりみれば』ほど社会に影響を与えた本はないということになる。アメリカの社会主義者で，ジャーナリスト兼作家であるエドワード・ベラミーが1888年に著わした『かえりみれば』は，アメリカのみならず当時の世界的大ベストセラーとなった。アメリカ国内では発売以来２年間で35万部が売れた。また150以上のベラミー・クラブが設立され，ベラミーの理想の社会建設の実現を目指した。ベストセラーになった原因は主として大量の失業者に溢れ，ストライキの波が押し寄せる不況下のアメリカの深刻な社会状況にあるといえようが，ベラミーのユートピアに細かく描きだされた機能的な労働者国家の描写の力も一因だといえよう。ところで『アメリカ古典文庫７　エドワード・ベラミー』の解説を担当している英文学者の本間によれば，ベラミー・クラブはナショナリスト運動に引き継がれ，政治結社「人民党」の運動がそれに続いたとある。ベラミーはこうした動きに熱烈な支持を寄せ，富の平等はアメリカ的な思想であり，「人民党」の運動は国有化のステップであると評価した。この小説はすでに1903年には日本でも翻訳が出版され，社会主義者に関心を持つ者たちに読まれた。

本間はさらに，アメリカの19世紀末は1861年〜1865年の南北戦争の影響が強く残り，個人主義からの解放＝自己犠牲を尊ぶ時代であったと説明し，さらに社会改革運動の精神が躍動した時代だとし，社会改革運動として婦人運動，禁酒運動，教育改革，刑務所改革，奴隷解放運動，理想社会建設運動を挙げている。アメリカの裏面史を描いたオットー・Ｌ・ベットマンの『目で見る金ぴか時代の民衆生活』によれば，1877年の経済危機および90年代の不況でアメリカの全労働者の５分の１にあたる400万人が失業し，80年代から1900年にかけては2000回以上のストライキが頻発したという。また1880年の社会は１％の支配層の収入と99％の被支配層の収入が同じという今日の格差社会以上の大格差社会であったという。こうした「大貧困社会」が『かえりみれば』執筆の背景となっている。

この『かえりみれば』は出版直後の他，1930年代および1960年代に注目を集めた。この二つの年代はいずれもナチスの台頭と学生運動の高揚がみられた政治危機の時代であり，社会主義のユートピアを詳細に書き込んだ『かえりみれば』が当時の社会主義シンパの強い関心を呼んだことは容易に想像

できる。西歴2000年から1887年を「かえりみる」ということがテーマのこの小説は1887年の醜悪な現実と理想的な2000年を徹底的に比較するのだが，21世紀の今日でも社会状況はむしろ醜悪な1887年に近いことからこの小説の先見性が見て取れる。

次に『かえりみれば』に即して，ユートピアの構造について見ていきたい。まず作品中に描かれた人間観および労働者の倫理について，国家体制について，女性解放についてさらに司法制度について考察を加えてみたい。これらの問題の記述は当時の社会情勢への鋭い批判ともなり，『かえりみれば』の特徴ともなっている。

執筆から100年以上たって『かえりみれば』を読む時，一番印象的なことは人間の浄化と労働者間の連帯意識ではないだろうか。作品中では2000年時には失業はなく，全ての人々が産業隊に属して働くこととなっている。労働者の心には「相互依存」「連帯感」といった社会観・人生観が確固として根をおろしている。それに対し19世紀後半の労働者の心理を特徴づけるものは「不満」や「不安」と「競争」であった。2000年に目覚めた19世紀人ウェストは説明する。「わたしの時代には，自分の俸給あるいは賃金に満足する者は一人もいませんでした。たとえ自分では十分にもらっていると思っても，きっと隣のやつは多くもらいすぎているにちがいない，それはけしからん，と考えたわけです。」それに対しウェストを無償で世話をするドクター・リートは文明社会論を開陳する。「文明社会には自活などというものはありえません。家族内の協力ということすら知らないほど野蛮な状態の社会なら，各個人が自分で食べていくかもしれません。その場合でも，生涯の一時期だけのことですよ。しかし，人間が集団生活をはじめ，どんな素朴なものであれ社会を構成しはじめる瞬間から，自活は不可能となるのです。人間がますます開花し，職業や仕事の分化が進むにつれて，どこでも複雑な相互依存があたりまえのことになります。」また雨の日はすべての通りに防水布がかけられ雨傘が不要となっている2000年には人々の生活態度は個人主義から協同主義に変わっている。「個人主義の時代と協力の時代のちがいは19世紀には雨が降るとボストンの人びとが30万の頭の上に30万の雨傘をさし，20世紀にはすべての頭の上に１本の傘をさしている事実がよく物語っている。」

『かえりみれば』の特徴の一つは労働者の組織および労働形態に関する詳細な記述である。機械化・効率化・管理化された2000年のユートピアを象徴するのは軍隊組織の産業隊である。産業隊の目標は勤勉への刺激を受けることと管理者の選抜である。産業隊の組織は次のようになる。「まず第一にあるのが部類分けをしていない普通労働者，つまりあらゆる仕事をする者の階級です。新入隊員はすべて最初の３年間この組に属します。この階級は一種の学校，それもひじょうに厳格な学校で，そこで若い人たちは従順，服従，義務への献身といったことを身につけさせられるのです。」国家労働組織は位階制度が導入され，見習い期間が終わると各人が自分の能力に応じた階級に振り分けられる。「機械的産業にしろ農業的産業しろ，各産業の内部組織はそれぞれの特殊条件に応じてさまざまですが，一般に労働者を能力に応じて第一級，第二級，第三級に分けることでは一致しています。そして各階級は多くの場合さらに一部と二部に分けられています。」各階級は異なった金属製のバッジを付けること，賞品や賞状の授与などでモティベーションづけが行われる。国民全員が21才から働き始め，定年は45

歳である。この国家指導の軍隊型産業組織はモリスの最も忌避するところであった。

労働の生産性に関する会話も興味深い。どんな職業についても労働者は生産量に関わらず同一時間働けば同じだけの報酬（通貨廃止後の配給制度で使うクレジット）をもらう。しかし一方では個人が最善を尽くすのが義務となっている。実際に社会主義諸国でも生産性を高めるべく労働者のモチベーションを高く保つことは至難の技で，ソ連邦をはじめ多くの社会主義国では「労働者英雄称号」が定められ，多くの労働英雄が表彰され，ニュースや映画に登場したことを記憶している人も多いだろう。作中の2000年にも豊かな社会の維持のために高い労働倫理が求められる。「しかし，結果として生産物の量はこの問題とは何の関係もありません。これは功過の問題なのですから。功過は道徳上の問題であって，生産物の量は物質的な量です。道徳上の問題を物質的な基準で決定しようとするのは，異常な種類の論理でしょう。努力の量だけが，功過の問題に関係するのです。自己の最善をつくすものはみなおなじことをしているのです。」

こうした2000年時点の労働倫理を支える国家の経済制度は計画経済である。エンゲルスがその著作『空想（ユートピア）から科学へ』で唱えたようにこの制度は，国家が生産・流通・分配を管理し，物財バランスに基づいて国民に生活物資を配給するシステムである。計画経済は生産・流通・分配段階で無駄をなくし合理化を進めることで，生産過剰による恐慌を避けるメリットがあり，歴史的に見れば恐慌の時代には高い経済成長率を示したのであるが結果的に失敗し，社会主義国家の崩壊の大きな原因となった。ドクター・リートは少数のシンジケートの支配で社会の格差が広がった後，独占企業化の最後の形態つまり全産業の国有化が行われたと説明する。「今世紀のはじめに，国内の全資本を最終的に統合することによって，その進化は完了しました。この国の工業も商業も，一部の無責任な企業や私人のシンジケートの手で，その思うままに，しかもその利益のために運営されることをやめ，人民を代表する単一のシンジケートに委託され，共同の利益をめざす共同の関心に従って運営されることになったのです。すなわち国家が，ほかのすべての資本家にとってかわった単一の資本家であり，唯一の雇用者であり，それまでの小独占企業をすべてのみこんだ最終的な独占体，すべての市民のために利潤と節約をめざす独占体でありました。」

『かえりみれば』では2000年には全ての私企業が国営化し国民は国家からクレジット・カードをもらい見本を見て欲しいものを注文する。卸売・小売と多くの無駄を抱えた商業は廃止され，町から商店は姿を消している。説明役のドクター・リートの説明は以下のように続く。「国全体の年々の生産のうち，各市民の分け前に相当するクレジットが毎年の始めに公の帳簿に記入され，クレジット・カードが発行されます。そのカードを使って，あらゆる町にある公共倉庫で何でも自分の欲しいものをいつでも欲しい時に手に入れるのです。こういう仕組みが，個人と消費者のあいだのいかなる種類の商取り引きの必要性をまったくなくしてしまうことは，おわかりになるでしょう。」さらに通貨も廃止され金融業も存在理由を失う。「わたしたちが節約しているもうひとつの項目は，通貨を使わなくなったことと，あらゆる種類の金融活動に関係していた無数の職業を廃止したことです。昔はこのために多くの人間が有益な仕事から差し引かれていたのですからね。」

アメリカでは19世紀になると多くの女性が職業を持つようになった。アメリカの女性運動は一方では「女性の働く権利」と「同一労働・同一賃金」をめざす女性労働者の運動であり，同時に人権問題としては参政権や財産権さらに結婚制度改革を要求する運動でもあった。こうした運動は19世紀末には全米に広がりを見せ，女性だけの労働組合も結成された。『かえりみれば』では男女同権が実現した未来社会での「働く女性」が話題にのぼっている。主人公が19世紀の女性はみじめで骨折ることが多かったのに対し20世紀では女性はより多くのものを得ていると述べたのに対し，ドクター・リートはこう返答する。「まったくそのとおりです。男性についてもそうですけどね。しかも今日の女性はひじょうに幸福ですが，19世紀の女性は，今日言われていることにたいした誤りがなければ，きわめて惨めでした。今日の女性が昔よりもはるかに有能な男性との協働者であると同時にこれほど幸福でもある理由は，男性の労働と同じく女性の労働に関しても，各人がそれぞれに最も適応している仕事を与えるという原理が守られているということです。」女性は仕事を与えられ家事の負担から解放され人間的にも成長するチャンスが与えられる。「わたしたちからみると，女性はほかのどの階級にもましてあなたの時代の犠牲者だったと思われます。これほどの時を隔てても，結婚によって発展を止められた当時の退屈で未発達な生活や，物理的には家の四面の壁により，精神的には個人的関心の範囲の小ささによってしばしば制限された彼女らの視界の狭さを思うと，何かしらしみじみと哀れを感じさせられるものです。」

女性が男性に扶養された19世紀と異なり，恋愛も結婚もより自由で束縛のないものとなる。男女は対等な関係で出会い，純粋に愛に基づいて結婚する。ドクター・リートはその間の事情をこう説明する。「あなたの時代の男女の関係が人為的な技巧で彩られていたのに対して，今日ではまったくの率直さと束縛のなさがその特徴になっている点だろうとわたしは思います。いまの男女は完全に同等な人間，愛のみを求めあう求婚者としての気楽さで出会います。」純粋な愛だけの結婚は19世紀人ウェストにとって「驚くべき現象」と映るのである。

嘘をつく人間がいなくなった社会では法学も弁護士も必要なくなり，裁判もほぼなくなった社会となる。裁判があった場合，判事は大統領から任命され普通は一人で判決をくだす。私有財産も物の売買もない社会では立法は不必要となり，州政府も廃止となり大統領以外政治家もいない。国務省も財務省もなく，世界中が同じ体制になったので戦争もなく陸軍も海軍も存在しない。外国に行く場合も自国のクレジット・カードが通用する。かろうじて司法と警察だけが存続している。芸術に関する記述は少ないが演奏家と音響効果抜群のミュージックルームを電話で結ぶ装置が興味を引く。定年は45歳で，定年を迎えた人は一部の人が社会奉仕をする他は悠々自適の生活を送る。

ベラミーの描くアメリカの社会主義未来社会は労働者階級が政権を取った後の社会である。そこは無駄のない計画経済制度が確立し，階級差別や性差別などあらゆる差別が撤廃され，「相互依存」を前提とし「連帯感」に満ち溢れ，心も体も美しくなった人間の生きる理想社会である。私有財産は廃止され，すべての企業は国営化され，労働者はすべて職を得て，同一の報酬（クレジット・カード）を受け取る。無駄な金融業は廃止され，貨幣も銀行もない，権力欲に取りつかれた政治家も弁護士もい

ない明るい「ユートピア」が実現されている。

ただしベラミーの描いた「社会主義ユートピア」は産業をすべて統制下におく国家管理型の「国家社会主義型ユートピア」といえる。このアメリカ作家のベラミーの描く「ユートピア」には，アメリカ国内の経済状況とともに世紀転換期の世界の経済状況の変化が大きく影を落としていることも指摘しておきたい。世紀転換期は世界の経済の中心がイギリスおよびフランスから，アメリカおよびドイツへと移行した時期に当たる。この時期アメリカ資本主義はトラスト中心で発展し，シンジケート（企業連合）結成や企業買収が行われ，重化学工業を中心に，企業の合同・合併・集中が進んだ時代でもある。こうした産業の変化は当然世紀転換期の社会主義者の描くユートピア社会を規定した。社会主義ユートピア社会の国有企業はこうしたシンジケートの発展形態なのである。数世紀にわたりアメリカは欧州の人々の夢を実現するユートピアであったが，この時代各個人ではなく国家が個人の夢をかなえるといった構想が人々の夢となった。ベラミーはこの点で世紀転換期のアメリカの夢を描きだしたといえる。ロシア文学者川端香里は『ユートピアの幻想』で次のように分析している。「このような暴力なしの未来社会移行論と，もっぱら経済的・物質的富を保証するように見えたベラミーのユートピア（2000年になればだれでも快適な生活が楽しめるという）は，この物語のロマンス風の筋書きとあいまって，この時代のアメリカのブルジョワ・中産階級の嗜好にあった。」

しかし一方では国家社会主義的な超管理社会では労働者の自由は問題にならない。自由がない超管理社会は反ユートピアともなる。フレデリック・ジェイムソンはこの作品をディストピア小説の先駆的作品と見る見方を示している。またベラミーの描くユートピアは機械文明が頂点に達した機械文明ユートピアである点も見逃してはならない。ベラミーは実現可能と思われる「ユートピア」をアメリカ産業の発展の延長線上にリアルに描いた。産業の機械化・経済および社会の管理化の先にはたして「ユートピア」はあるのか。「中世志向」のイギリス人芸術家兼社会主義者ウィリアム・モリスは，中世の視点および芸術家の視点から当時の社会を批判し，独自の「ユートピア」を構想した。

3．3．　モリスの『ユートピアだより』について

ベラミーの『かえりみれば』を一読して，ベラミーの描く社会主義の未来社会について憤然と異議を申し立て，一気に『ユートピアだより』を書きあげたのがイギリスの社会主義者で詩人，またデザイナーでもあったウィリアム・モリスであった。19世紀末産業革命で大量の工業製品が社会に溢れ，手工業者たちがプロレタリアートへと落ちぶれていき，国中がストライキで騒然とするなか，モリスは社会主義者組織「民主連盟」に加入し，機関誌を発行して，政治活動を行うとともに，芸術と労働の結びついた未来社会を構想した。また同時に芸術と生活の一致を唱えて自らもインテリア製品等を取り扱うモリス商会を組織してアーツ・アンド・クラフツ運動を世に広めた。この『ユートピアだより』は自ら編集する雑誌『コモンウィール』に全39回にわたって連載されたもので，改訂版『ユートピアだより』は1891年に発行された。ちなみに本邦初訳（抄訳）は，1904年（明治37年）堺利彦の手で行われ，タイトルは『理想郷』だった。堺は社会主義者で，幸徳秋水とともにマルクスの『共産党

宣言』の本邦初訳を手掛けた人物でもある。さらに1925年（大正14年）には『無何有郷だより』という題で全訳が布施延雄 訳が，1927年（昭和４年）には『無何有郷通信記録』という題で村山勇三訳が出ている。

この『ユートピアだより』の最大の特徴は，社会的分業のない無階級社会での労働の楽しさを歌いあげた点にある。19世紀には苦しみであった労働はここでは楽しみとなっている。「すべての仕事がいまは楽しいものです。そのわけの一つには，名誉と富とを得ようと希望をいだいて仕事をしているからです。」そしてその報酬とは金銭ではなく「創造という報酬」なのである。革命の過程の中で楽しい仕事が機械的労働を駆逐していったのである。「快楽のある労働が機械的な労働を排除しはじめたのです。」また道路工事や草刈りといったいわゆる肉体労働の喜びも「快楽のある労働」として取り挙げられる。「そこには十二人ぐらいのたくましい若者たちがいた。まるでわたくしの覚えている時代に見たオックスフォードのボートチームのように見えた。」この十二人は「働きぶりもとても器用」で，その体つきは「美しい，すがすがしい格好体格」と表現されている。

マルクス経済学者大内秀明は『ウィリアム・モリスのマルクス主義』でアダム・スミスに代表される19世紀の労働観である「労働の苦しみ」（toil and trouble）とモリスの主張する「労働の楽しみ」（joi and pleasure）を次のように解説している。「資本は利潤を追求する。利潤追求を目的に投資し，競争し，雇用する。そのための手段が，資本家的生産方法のもとで働く労働者であり，彼の労働である。だから，コストをできるだけ切り下げて利潤を確保するためには，労働者の労働も toil and trouble 故に，つまり負の効用故に，生産性を向上して，苦痛を和らげるように働く」として，スミスの労働観は，「市場経済の個人主義＝利己主義に基づいたイデオロギー」だとする。それに対し中世のギルドを理想とするモリスの労働観は，「商業主義のイデオロギーから離れ，中世以来のギルド的な職人の技能労働を見ると，それは骨折りでも，苦労でも，負の効用でも何でもない〈喜びと楽しみ〉，つまり joy and pleasure なのです。」しかし手工業など一部の職業を除きこうした芸術と結びついた労働は存在するであろうか。ここに中世志向の労働観の限界も見てとれるのではないだろうか。中世は厳しい身分社会で，親方・職人・徒弟からなる徒弟制度は厳格なピラミッド型の組織で自由に腕を振るえたのは親方のみであった。モリスの労働観は生活と芸術を結びつけるアーツ・アンド・クラフツ運動の一環としてとらえるべきではないだろうか。モリスの労働観はイギリスの歴史学者ポール・トムスンの『ウィリアム・モリスの全仕事』によれば，モリスの先達者ラスキンの「芸術は労働における人間の楽しみの表現である」という考え方を継承したものであった。トムスンはモリスの手紙を引用してモリスの労働観を説明している。「働くさいに楽しみが得られる希望でもない限りひとは働かないであろう。私はこの文が別の言い方をすれば，まず現世界のあらゆる仕事が意に反して行われているのを表していると理解した。」

1960年代の新左翼運動のイデオロークの一人マルクーゼも『ユートピアの終焉』で「遊び」としての労働こそ労働の本質とし，「社会主義への道の理念を〈科学よりユートピアへ〉と把握しなければならないのであって，エンゲルスの言うごとき〈ユートピアより科学へ〉ではない」とし，「自由の王国」

（筆者注　共産主義社会）を労働の中に見出すことに現状改革の新しい可能性を見出している。

次にこの作品におけるユートピア人の道徳観はどうであろうか。『かえりみれば』と同じくここでも人々は個人主義，自己本位的な態度を克服している。「われわれは自然と，無理のない戦いをして生涯を過ごしています。われわれ自身のただ一面だけではなく全面を活動させ，この世界の生きとし生けるものに最も鋭い喜びをもちながら。そこでわれわれにとっては自己本位でないことが信用の眼目となるのです。」あらゆる職業に貴賤はなく，塵埃運搬人は中世風の黄金入りの豪華な服を身につけている。

モリスの『ユートピア』でも無駄をなくした計画経済が定着している。話し手のハモンドは「世界市場」の成立と「生産費の低減」の要求が労働者を苦しめた19世紀の経済制度をこう批判する。「このいわゆる〈生産費の低減〉のためにはあらゆるものが犠牲にされました。仕事に従事する労働者の幸福，いや，それどころか，最も基本の癒しや最小限の健康，食物，衣服，住居，余暇，娯楽，教育―要するに生活全体ーはものの〈安価な生産〉というこの恐ろしい必要に対しては，秤にかけられた一粒の砂の重みしかありませんでしたが，さてそれらのものの大部分は，まったく生産にあたいしないものでした。」次の世紀では市場経済はその非効率性のために完全に姿を消している。「われわれがつくる品物は必要だからつくられるのです。人々は，あたかも自分自身のためにつくっているかのように，隣人たちに使ってもらうためにつくります。まったくなんの知識もない，コントロールのできない，漠然たる市場のためにつくるのではありません。売買というものはいっさいありませんので，なにか求められることを見越して品物をつくるなどということは狂気の沙汰でしかないでしょう。」

次にモリスの女性像に触れてみたい。19世紀末イギリスは川本静子が『〈新しい女たち〉の世紀末』で述べているように，「新しい女」が小説のヒロインに大挙して登場する時代であった。ヴィクトリア朝の理想の女性像は上品で頼りになる「家庭の天使」であったが，「家庭の天使」は性的魅力とは無縁の人形のような存在であった。なぜなら「私有財産制度にもとづく家父長制社会は，その財産を受け継ぐべき子孫の正当性を保証するため，妻となる女性を〈生殖のための性〉に終始させ，〈快楽のための性〉から切り離してしまったからである。」当然女性の本質や役割に関する見直しが女性から要求され，フェミニズム運動が活発に展開された。政治的目標と並んで自由恋愛・自由結婚に基づく新しい結婚観や新しい両性関係が求められた。しかしモリスの描く女性像は働く女性より母なる女性を尊重する伝統的なヴィクトリア朝道徳をある面で越えていないように思われる。説明役のハモンドは答える。「われわれの間では，母であることが非常な名誉と考えられている。それ以外にははたしてなにがありうるのか。」貧困とヴィクトリア朝道徳の虚飾に満ちた19世紀の女性たちより確実に未来の女性が自然な生き方が出来る。「普通に健康な女は，子供を生むもの，子供を育てるものとして尊敬され，女性として男から望まれ，伴侶として愛され，子供たちの将来について不安をもたず，昔のあくせく働いたひとやあくせく働く者たちの母親が持ちえたより，あるいはまた，生まれながらの諸事実にかんして無知を気取ったなかに成長し，上品ぶったおこないと好色のまじりあった雰囲気のなかに育てられた過去の上流階級の姉妹よりも，はるかに母性本能をもっています。」もっとも「女性の平等を認

めない人は社会主義者とはいえない」とバーナード・ショーに語ったといわれるモリスは当時活動を共にしていたマルクスの娘エリノア・マルクスを通して，フェミニズムに接していた可能性が強い。しかし以下のトムスンの指摘が妥当であるように思われる。「モリスは，男女両性における損失が経済体系の特質から直接に派生すると信じていたので，1880年代の前社会主義的中産階級の女権拡張論者の運動には，たいして希望が見いだせなかった。」

ところで「ユートピア」の住人たちからすれば19世紀の諸悪の根源は「神聖な私有財産」であった。あらゆる犯罪や争事の温床はじつに「私有財産」であったので，私有財産の廃止された「ユートピア」では法律も法廷もまた牢獄もなく，そもそも特権階級の支配の道具である政治が存在しない。そこでは直接的な言及はないが状況からして「国家の死滅」が実現している。「事態をもっと綿密に見ましょう。そうすれば暴力犯罪がどこから起こるのかがわかりましょう。過去のこういう犯罪の大部分は私有財産法の結果でした。それは特権をもった少数の者以外のすべての人に，かれらの自然の欲望を満足させることを禁じたのです。それはまた，この法律からくるだれの眼にも明らかな弾圧の結果でした。」

社会主義運動内の路線闘争で議会外闘争を唱えた作者モリスはハモンド老人に次のように言わせている。「議会は，一方では上流階級の利権がなんの損害もうけないように見張るために開かれている一種の監視委員会であり，他方では人民をだまして，かれらがかれら自身の問題の処理に若干は関与しているのだと思わせるための一種の目かくしではなかったのですか？」

よく指摘されているように，モリスの中世趣味はいろんな場面に顔を出している。ボートの漕ぎ手のハンサムで筋骨たくましい若者の服装は次のように書かれている。「衣服はわたしがいままでに見た近代のどんな仕事着にも似ていず，14世紀の風俗画にある服装としてもじゅうぶんにつかえそうなものであった。それは濃青色の毛織物で，ごく簡素な，しかし良質の織物で，一点のよごれもなかった。」橋の描写も印象的だ。「ではあの橋は！わたしはおそらくああいう橋を夢に見たことはあったろう。しかしこんなのは挿絵入りの写本以外ではみられない。フィレンツェのポンテ・ヴェッキオ橋でさえそばにも寄りつけないほどのものであったから。それは石のアーチでできていて，すばらしくがっしりし，堅牢でもあり，優美でもあった。」モリスは美的中世から現在の諸問題を考察し，美的未来を構想するのである。

モートンは『ユートピアだより』の魅力を次のように述べている。「モリスのユートピアは，いわゆるユートピアではないユートピアの最初のものである。これまでのユートピア物語でわれわれの注意をひくのは，いずれもその細部であった。ところがここではあれこれの細部に疑問があるとはいえ，重要な点は，歴史発展の意味と，無階級社会における生活の本質にたいする人間的理解がみられることである。」

『ユートピアだより』はユートピアの詳細な描写や女性の理解に関しては『かえりみれば』と比べて劣るものの，「労働の楽しみ」の強調や労働組織の構成の点では，『かえりみれば』よりもユートピアの本質に関する理解が一層深いといえる。

4．社会主義とユートピア

ここでは『かえりみれば』と『ユートピアだより』の根底にある社会主義思想を，作品に関係のある範囲で考察する。

そもそも社会主義とユートピアの密接な関係は近代社会の成立時まで遡る。和田春樹はこうした事情を『歴史としての社会主義』で次のように述べている。「社会主義思想は，近代市民社会，資本主義社会の矛盾が進化した段階で，その危機からの脱出を求める思想として登場したものではなく，すでに近代市民社会の誕生と同時に生まれた立会人であり，その時点からのいわば批判的同行者だった。社会主義思想は，現実の社会とは異なった，望ましい社会についてのヴィジョン，すなわちユートピアをめざす思想であり，そのユートピアの内容を社会主義と表現する思想である。」

社会主義（英 Socialism 独 Sozialismus）という語は，19世紀の初頭イタリア語の文献に“socialismo”という形で初登場している説もあるが，坂上孝の『フランス社会主義』では，1833年のフランスの初期社会主義者のピエール・ルルーの論文の表題「「個人社会と社会主義について」が「社会主義」の最初の使用にあたると紹介されている。和田は1827年のロバート・オーウェン派の「協同組合雑誌」における使用を紹介している。いずれにしても「社会主義」という単語は初期社会主義者が活躍した時代に一般に使用される言葉になったのであった。

1848年の「諸国民の春」と名付けられたフランス二月革命およびヨーロッパ各地の三月革命は，フランス国王の退位とウィーン体制の終焉の引き金となった。この革命はブルジョアジーだけでなくプルードンやブランキなどの社会主義者も参加したことが知られている。

同年社会主義者や無政府主義者をメンバーとする共産主義者同盟の第三回ロンドン大会の綱領のために書かれたのが『共産主義者宣言』（筆者注：別名『共産党宣言』ドイツ語の表記に二種類あるため）である。このマルクスとエンゲルスが共同作成した『共産主義者宣言』は，階級闘争史観，私有財産制の廃止，国家の揚棄，ブルジョア的結婚制度廃止，家族制度や教育制度の見直し，国際協調主義の強調など世紀末社会主義ユートピアへ大きな影響を与えたものと思われる。

柄谷行人は『共産主義者宣言』の解説で，この書物以降の社会主義の流れを次のように説明する。まず第一に挙げられるのが「社会民主主義」の流れであるが，「先進資本主義における議会主義的変革，さらに国家による計画的な経済を提唱する」社会主義である。国家との結びつきが強いので「国家社会主義」（state socialism）と呼ばれることもある（筆者注：ナチスの国家社会主義は一般に national socialism とよばれる）。第二の流れが後に「マルクス・レーニン主義」とよばれるボルシェヴィズム（レーニン主義）である。過渡的な形態とされた国家形態＝プロレタリア独裁国家を理論化し，ロシア革命成功後は「共産党」を名乗り，「第三インターナショナル」（コミンテルン）を組織した後，「世界中の社会主義運動を統制する機関」となった。第三の流れがアナーキズム的社会主義である。1871年のパリ・コミューン後の一時衰退したが，アナルコ・サンディカリズム（無政府組合主義〉として復活した。議会主義は取らず直接行動を唱える。1960年代の「新左翼」の思想傾向もこれに近い。以

上が柄谷のまとめであるが，第一の流れと第二の流れをともに「国家社会主義」とくくることもできよう。本稿では「中央集権型組織」対「連合型組織」の対立を重視し，「国家社会主義」対「共同体社会主義」の構図を採用する。

『共産主義者宣言』では，生産手段や工場や銀行や鉄道の国有化が目標とされ，軍隊式の労働組織「産業軍」が主張されていて，ベラミーの『かえりみれば』に大きな影響を与えていることが窺われる。第二章の最後では「一人一人の自由な発展が，すべての人の自由な発展のための条件となるような連合体が現れる」とある。この文章はマルクス・エンゲルスの共作である『ドイツ・イデオロギー』（“Die deutsche Ideologie”）の分業廃止を想起させる。「私は今日はこれ，明日はあれをし，朝は狩をし，昼に漁をし，夕方には家畜を追い，食後には批判をすることが一猟師，漁師，牧夫，批判家になることなく，私の好きなようにそうすることができるようになる。」

和田のマルクス・エンゲルス的ユートピア批判は重要である。「マルクスのユートピアには，バブーフの農業的ユートピアとサン・シモンの産業的，社会組織的ユートピアをまぜたものであるように見える。しかも，サン・シモンが〈新しいキリスト教〉というものがなければならないと考えていたような掘り下げた人間観がない。」

1880年に出版された「空想より科学へ」（“Die Entwicklung des Sozialismus von der Utopie zur Wissenshaft”）でエンゲルスは『反デューリング論』をまとめ，「ユートピア社会主義者」批判と資本主義発展の歴史を展開している。日本では「空想社会主義者」と訳され，かなりなマイナス・イメージでとらえられているオーウェンらの「ユートピア社会主義者」は，実際はこの小冊子ではかなり高く評価され，時代的限界（筆者注：プロレタリアートの未成熟）を越えられなかっただけだとされる。エンゲルスはここでも階級闘争史観を展開し，計画経済の採用，産業の国有化を唱えるとともに，国家の死滅に触れている。国家は生産手段の国有化という大事業を行うと死滅する。「国家権力が社会関係に対して行ってきた干渉は，一領域から他領域へと無用の長物となり，ついには順々に眠りにつく。人間に対する統治に代わって物の管理と生産過程の支配が現れる。国家は廃止（“abaschaffen”）されるのではない，死滅する（“absterben”）のである。」

1864年にはロンドンで世界初の国際的な労働組織である国際労働者協会（別名第一インターナショナル）が設立され，カール・マルクスが起草した創立宣言と規約が採択された。宣言では政権奪取が労働者の義務と謳われたが，内部分裂で1876年に解散した。内部分裂の主な要因はマルクス派と反マルクス派の対立であった。大内のまとめによれば「国家社会主義」対「共同体社会主義」の対立であった。前者はブルジョア国家の支配をプロレタリアの国家権力に変え，私的所有を国家所有に変え，上から経済の計画化を図ると主張し，後者はプロレタリア解放は労働者の階級的自立と連帯にあるとし，新たな共同体は分権・自治に基づく社会でなければならず，国家は死滅させるべきだと強調したのであった。

1885年に書かれたマルクスの『ゴータ綱領批判』（“Kritik des Gothaer Programms”）は，「国家社会主義」の色彩が強いドイツ労働者党の『ゴータ綱領』を批判する文書で，正式には『ドイツ労働

者綱領への欄外註釈』といい，マルクスの死後1891年にエンゲルスにより出版された。この文書にはマルクスの革命戦略，とくに資本主義から社会主義への過渡期社会の構想が述べられている。資本主義から社会主義への過渡期には二段階戦略がとられる。労働の分野では「各人は能力に応じて働き，必要に応じて受け取る」段階に到達するまで「能力に応じて働き，労働に応じて受け取る」段階を通ることになる。また政治の分野では「資本主義と共産主義のあいだには，一方から他方への革命的な変化の期間がある。マルクスは過渡期社会をこう総括する。「これに対応して，政治的な移行期間もまた存在しているのであって，この期間はプロレタリアートの革命的独裁でしかあり得ない」とする。生まれ出たばかりの共産主義社会は「生まれ出てきた母胎である古い社会の母斑を経済的，道徳的，精神的になど，あらゆる点で身に帯びている共産主義社会である。」

社会主義関連書でモリスが一番熱心に取り組んだのが『資本論』（“Das Kapital”）で，ドイツ語が読めなかったモリスは，1883年にフランス語版，1887年には英語版を読み，生涯の愛読書の一つとなった。大内によれば日本で初めの『資本論』の解説は1907年（明治40年）に山川均によってなされたが，その中身はモリスとバックスの共著『社会主義』からの抜粋であるという。明治日本へ世紀末イギリス帝国を紹介したのはモリスであった。「明治の日本では，『資本論』といい，マルクスといい，社会主義といい，いずれもモリスとともに輸入されたのです。」1960年代の学生運動のイデオロークの一人であるマルクス経済学者平田清明は『市民社会と社会主義』で，社会主義社会を『資本論』に基づいて「共同の生産手段をもって労働し，その多くの個体的労働力を，自覚的に，一つの社会的労働力として支出するような，自由人の一連合」としている。モリスの「共同体社会主義」には『資本論』に描かれたこの社会主義ユートピアが色濃く反映している一因は，モリスの読書経験によるところが大きいといえるだろう。

その他エンゲルスと接触のあったモリスはエンゲルスの『家族・私有財産・国家の起源』（“Der Ursprung der Familie, des Privat-Eigentums und des Staats”）や『1844年のイギリスにおける労働者階級の状態』（“Die Lage der arbeitenden Klasse in England”）にも目を通し，マルクスの『フランスにおける内乱』（“Der B ürgerkrieg in Frankreich”）も英語版で読んでいた。その他モリスは『社会主義』の共著者でマルクスやエンゲルスと接触していたバックスからも社会主義に関する多様な知識を得た可能性が強い。さらにモリスは不労所得の廃止を主張する初期社会主義者＝ユートピア社会主義者のプルードンにも大きな関心を寄せていた。

５．現代とユートピア

19世紀末ベラミーとモリスが描いた貧困のない世界，道徳的にも肉体的にもレベルアップされ美しい肉体と精神を備えた人間の登場する世界，全ての人が労働に従事することによって労働者全員が連帯感をもつことになった世界，あらゆる差別がなくなった世界，つまり19世紀末のユートピアは現代人のユートピアでもある。

21世紀の今日，20世紀後半に隠されていた貧困は大きな社会問題となり，カジノ型資本主義は大きな格差社会を生みだした。2011年後半には1960年代の平和運動や「アラブの春」に連なる「オキュパイ・ウォールストリート」運動が全米および全世界の注目を引いたが，その大きな目標は貧困の撲滅と現代資本主義システムの変革である。この運動のスローガンは「2500万人以上が無職で，5000万人以上が健康保険に入っていない」「我々のシステムは壊れている」である。大量失業の時代でありデモの多発したアメリカの19世紀末と同じく，21世紀初頭にも現存の格差社会に反対するユートピア運動が広がりを見せている。ウォール占拠の後も運動は止む気配がない。

この問題の背景には19世紀と同じ問題が存在する。相も変わらず問題は国会議員の腐敗つまり「国会議員が私企業や圧力団体の代理人になっている」という現実である。五野井郁夫『〈デモ〉とは何か』によればこの運動の政府への要求事項は，政府による大手金融機関のみの救済への批判，富裕層の税制優遇措置廃止，金融規制の強化，高頻度取引の規制である。運動形態は直接民主制で，全員の合意を目指し，リーダー不在及び指針がないことが特徴とされ，「ユートピアだより」の地方での話し合いを思わせる。

五野井は「脱原発」デモの運営にもこの直接民主主義方式の存在を指摘する。「運営にさいして注目されるのは，だれかが中心にとなるのではなく，多中心ないし脱中心なものだったことだろう。全員の意思が反映されるというオキュパイ・ウォールストリートなどと同様の直接民主主義の実践がなされていた。」政党政治の衰退の認識とそれにともなう直接民主主義の採用はモリスの認識と近い。柄谷はオピニオン雑誌『世界』で，反原発デモ参加者は単なる個人としてではなく「アソシエーション」として参加しているはずだとし，その「アソシエーション」こそ共同体（地方公共団体や労組など）の解体の後にできた新しい「アソシエーション」だと説明する。また柄谷はデモと集会は一体のもので「アセンブリ」と名付けられるべきで，議会政治が機能不全を起こしている今，現在の反原発「アセンブリ」に代表制民主主義と異なる民主主義の可能性を見ている。反原発運動の先頭に立つ社会学者小熊も『社会を変えるには』で，原発事故の原因は市民の安全を無視し，戦後日本の工業化社会を支配してきた独占企業・行政・政治の複合体にあるとし，社会を変えるためには市民自身が議会外の直接民主主義的な運動を進めるべきだと主張する。「しかしいまでは，デモの主催者は，場を作るだけです。その場に老若男女，いろんな人が集まってきます。どういう訴え方をするかは，場を壊してしまわないならば，集まってきた各自が決めていいし，自分で決めなくてはいけません。」

日米のこうしたデモ・集会の呼び掛けに威力を発揮したのがSNSであった。五野井は次のように書いている。「人びとの路上での直接行動は，インターネットを介したSNSの活用による参加者への詳細な情報共有と徹底した非暴力のガイドラインの周知，そして参加者らによるネット上でのフォーラムや情報のアップロードなど，「社会運動のクラウド化」という新たな局面を見せている。これによって，人びとはネットに接続できてさえいれば「社会運動を持ち歩く」ことができるようになったのだ。」議会外活動におけるSNSの活用も現在の直接民主主義的な社会運動の特徴の一つとなった。

6．おわりに

これまでみてきたように19世紀は国際社会主義運動が発展しその理論の普及した時代であった。こうした労働者の運動の高揚を反映して，その延長線上に労働者階級の政権奪取後の世界の貧困のない明るく豊かな社会が描かれ，それが『かえりみれば』『ユートピアだより』に代表される19世紀末社会主義ユートピア小説の特徴となった。小説で描かれる20世紀以降の未来社会は全ての争いごとや不平等の原因となっていた私有財産は否定され，裁判も法律も不必要な時代となった。また19世紀末の時代の病であった失業そして恐慌の時代は過ぎ去り，全ての人は働き場所を得て，労働者間の連帯感・相互扶助の精神が満ち溢れた世界でもある。また経済は計画経済が採用され，無駄な物の生産が廃止され，必要な物のみが生産される恐慌のない安定した世界となる。

ただ社会主義の組織形態に関しては国際労働者協会（第一インター）の設立当初から大きな対立があった。それは国家主導で中央集権型の「国家社会主義」と国家の廃絶を目指すゆるやかな連合体からなる「共同体社会主義」の対立である。マルクス派対反マルクス派（無政府主義的社会主義者）の対立でもあった。国際社会主義運動のイデオロークのマルクスとエンゲルスがプロレタリア独裁国家を唱えたり国家の死滅を唱えたりと国際情勢や理論研究の段階により微妙に意見を変えたことも混乱の一因であった。しかし1917年の共産主義革命の成功と社会主義国家ソビエト連邦の成立からは「国家社会主義」が絶対的な優勢となったが，この対立は第一インターの設立時から現在に至るまで続いている。わが国でも大正時代のアナ・ボル論争が知られている。この論争はあらゆる権威を認めないアナーキストと中央集権的な「国家社会主義者」の論争であった。

すでに見てきたように19世紀末の代表的社会主義ユートピア小説である『かえりみれば』と『ユートピアだより』の最大の対立点も「国家社会主義」と「共同体社会主義」の対立にあった。まずこの二つの作品が社会主義の大きな二つの潮流を代表していることを確認したい。20世紀には実際にソビエト連邦を主とする「国家社会主義」を実現した国家が歴史に登場したこともあり，『かえりみれば』の詳細な社会描写における現実感は『ユートピアだより』をはるかに凌いでいるのだが，『ユートピアだより』にみられる「共同体社会主義」も，衰退したわけではなく「アナルコ･サンジカリズム」（組合主義）や環境保護運動に脈々と生きていて，現実感がないわけではない。またユーロッパ議会の最大多数派を占める社会民主主義もどちらかといえば「国家社会主義」に位置づけられることも確認しておきたい。

また労働観の違いも『かえりみれば』と『ユートピアだより』の大きな違いである。『かえりみれば』では教育を終えた若者は芸術家・ジャーナリストなど例外を除いて軍隊式の「産業隊」に強制加入させられて，厳格な訓練を受けた後45歳の定年まで全力で働かねばならないとあり，労働は義務である点が強調されるが，労働が「楽しみ」かどうかは問題とならない。一方風光明媚なテムズ河畔で働く人にとって労働は芸術であり喜びである。物は商品として流通することはないので使用価値そのものとなる。中世的風景の復活・手工業の最大限の復活と私有財産制の廃止・国家の死滅を同時に実現し

た社会は，中世の夢と社会主義の夢を同時に実現したまさしくモリスのユートピアであった。

最後に19世紀末社会主義ユートピアの今日的意義について述べてみたい。ベラミーは現代以上の格差社会であった19世紀末アメリカで，差別や格差のないユートピアを描いて，格差是正を求める市民を元気づけた。モリスは19世紀末イギリスのナショナル・トラスト運動に参加し，地方や都市の環境保護につとめたことでも知られている。また古建築物保護にも尽力した。またしかしなぜ環境が破壊されるのかを社会的・経済的にも理解した環境保護運動の先駆者でもあった。また政治面では直接民主主義的な地方重視の「共同体社会主義」を唱えた。

格差社会反対運動や原発反対運動など現状改革運動が広がりを見せるとともに，議会政治が民衆の声を反映しなくなった今日こそ，ベラミーやモリスが描いた19世紀社会主義ユートピア構想を再検討する必要があるのではなかろうか。また貧困を自己責任とする今日の風潮の中で，人々の間の強い連帯意識が貧困撲滅の強力な武器であることも，彼らのメッセージとして受け止めることができよう。

原稿提出　平成23年９月５日
修正原稿提出　平成23年11月９日

参考文献

有賀夏紀，『アメリカ・フェミニズムの社会史』，勁草書房，1988年.
巖谷國士，『シュルレアリスムとは何か』，筑摩書房，2002年.
フリードリヒ・エンゲルス，『空想より科学へ』大内兵衛訳，岩波書店，2004年.
大内秀明，『ウィリアム・モリスのマルクス主義』，平凡社，2012年.
小熊英二，『社会を変えるには』，講談社，2012年.
小野二郎，「ウィリアム・モリス研究」（『小野二郎著作集１』，晶文社，1986年．所収）
樺山紘一「ユートピア」（平凡社　大百科事典　新版』，2004年所収）
柄谷行人，「人がデモをする社会」（雑誌『世界』９月号，2012年所収）
川元静子，『〈新しい女たち〉の世紀末』，みすず書房，1999年.
川端香男里，『ユートピアの幻想』，講談社，1994年.
轡田　収，「ドイツ・ユートピア小説試論」（『ユートピア旅行記叢書８』，岩波書店，1999年所収）
五野井郁夫，『〈デモ〉とは何か』，2012年.
坂上　孝，『フランス社会主義』，新評論，1981年.
佐々木斐夫「ユートピア」（平凡社　大百科事典　旧版』，1972年所収）
フレドリック・ジェイムソン，『未来の考古学１』秦邦生訳，作品社，2011年.
新村出編，『広辞苑　第６版』，岩波書店，2008年.
ポール・トムソン，『ウィリアム・モリスの全仕事』白石和也訳，岩崎美術社，1994年.
リンダ・パリー，『ウィリアム・モリス』多田稔監修，河出書房新社，1998年.
平田清明，『市民社会と社会主義』，岩波書店，1969年.
エドワード・ベラミー，『かえりみればー200年より1887年』（『アメリカ古典文庫―７　エドワード・ベラミー』所収）
中里明彦訳・本間長世解説，研究社，1975年.
カール・マルクス，『共産主義者宣言』金塚貞文訳柄谷行人付論，平凡社，2012年.

カール・マルクス，『ゴータ綱領批判』（『マルクス・コレクションIV』所収）細身和之訳，筑摩書房，2005年.
エンゲルス・マルクス，『ドイツ・イデオロギー新編輯版』広松渉・小林昌人訳，岩波書店，2002年.
ヘルベルト・マルクーゼ，『ユートピアの終焉』清水多吉訳，合同出版，1868年.
カール・マンハイム，『イデオロギーとユートピア』高橋徹・徳永恂訳，筑摩書房，2006年.
ルイス・マンフォード，『ユートピアの系譜』関裕三郎訳，新泉社，2000年.
アーサー・レスリー・モートン，『イギリス・ユートピア思想』上田和夫訳，未来社，1977年.
ウィリアム・モリス，『ユートピアだより』五島茂・飯塚一郎訳，中央公論社，2004年.
和田春樹，『歴史としての社会主義』，岩波書店，1996年.
Bellamy, Edward, “Looking Backward 2000-1887”, Oxford University Press, 2007.
Morris, William, “News from Nowhere and Other Writings”, Penguin (Revised), 1993.
Manuel, Frank E., Manuel, Fritzie P., “Utpia Thought in the Western World”, the Belknap Press, 1980.
Wilpert, Gero von, “Sachwörterbuch der Literatur”, Alfred Kröner Verlag, 1979.